

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）
令和5年度（2023年度）発生予報第5号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和5年度（2023年度）病害虫発生予報第5号（8月予報）

I 気象予報：令和5年（2023年）7月27日福岡管区气象台発表

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	10	20	70
	降水量	30	40	30
	日照時間	30	40	30

II 【今後、注意すべき病害虫】

1 発生の概要

作物	病害虫名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
早植え 水稻	穂いもち	並	やや少	やや少(-)	並～やや少 (±)	気温高(-) 降水並(±)	巡回調査、 防除員報告 (葉いもち)
	紋枯病	並	並	並(±)	並～少(±)	気温高(+) 降水並(±)	
	トビイロウンカ	並	並	やや少(-)	並(±)	気温高(+)	合志予察灯 やや少(-)
	コブノメイガ	並	並	やや少(-)	並(±)	気温高(+)	合志フェロモントラップ やや少(-)



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
普通期 水稻	葉いもち	並	並	やや少(-)	やや多~少 (±)	気温高(-) 降水並(±)	
	紋枯病	並	やや少	並(±)	並~少(±)	気温高(+) 降水並(±)	
	トビイロウンカ	並	並	並(±)	並~少(±)	気温高(+)	合志予察灯 やや少(-)
	コブノメイガ	やや多	やや多	やや多(+)	やや多~並 (±)	気温高(+)	合志フェロモントラップ [®] やや少(-)
大豆	ハスモンヨトウ	並	並	—	—	気温高(+)	フェロモントラップ [®] 調査 合志市栄 やや少 八代市鏡 少 阿蘇市 並 山都町 並 (-)
茶	炭疽病	やや少	並	少 (-)	並 (±)	降水並 (±)	
	カンザワハダニ	並	並	並 (±)	並 (±)	気温高(+) 降水並(±)	ほ場調査 御船町 やや少 (-)
	チャノキイロアザミウマ	やや少	並	やや少 (-)	並 (±)	気温高(+) 降水並(±)	粘着トラップ 合志市 少 (-) ほ場調査 御船町 やや少 (-)
	チャノミドリヒメヨコバイ	並	並	並 (±)	並~やや少 (-)	気温高(+) 降水並(±)	ほ場調査 御船町 やや多 (+)



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
茶	チャノホソガ	やや少	並	やや少 (-)	並～やや少 (-)	気温高(+) 降水並(±)	フェロモントラップ ^o 調査 合志市 やや少(-) 御船町 少(-)
	チャノコカク モンハマキ	やや少	並	やや少 (-)	並～やや少 (-)	気温高(+) 降水並(±)	フェロモントラップ ^o 調査 合志市 やや少(-) 御船町 やや少(-)
カン キツ	黒点病	並	並	並 (±)	やや多～並 (+)	降水並 (±)	宇城市 並(±)
	かいよう病	並	やや少	やや多 (+)	並 (±)	降水並 (±)	宇城市 やや少(-)
	ミカンハダニ	並	並	やや少 (-)	並 (±)	気温高 (+) 降水並 (±)	宇城市 やや少(-)
	チャノキイロ アザミウマ	並	並	並(±)	並～少 (±)	気温高 (+)	熊本市(河内町) 黄色粘着板調査 並(±)
ナシ	ハダニ類	並	やや多	並(±)	やや多～並 (+)	気温高 (+) 降水並 (±)	
	ナシヒメシン クイ	やや多	やや多	—	やや多～並 (+)	気温高 (+) 降水並 (±)	フェロモントラップ 調査 宇城市 やや多 (+)
果樹 全般	果樹 カメムシ類	やや少	やや少	—	カンキツ 並～少 ナシ やや少 (-)	気温高 (+)	各予察灯・ フェロモントラップ 調査 合志市、宇城市 天草市 少(-) ヒノキ球果口針 鞘数・ビーティ ング調査 やや 少(-)



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
夏秋 トマト	灰色かび病	並	やや多	並(±)	やや多(+)	降水並(±)	
	葉かび病	並	やや少	並(±)	やや多～並(+)	気温高(-) 降水並(±)	
	すすかび病	並	並	並(±)	やや多～並(+)	気温高(+) 降水並(±)	
	うどんこ病	やや多	やや少	やや多(+)	やや多(+)	気温高(-) 降水並(±)	
イチゴ 育苗ほ	炭疽病	並	並	並(±)	並(±)	気温高(+) 降水並(±)	
	ハダニ類	やや多	やや多	やや多(+)	やや多～並(±)	気温高(+)	
	アブラムシ類	やや多	やや少	やや多(+)	並(±)	気温高(+)	
夏秋 果菜類 (高冷地)	コナジラミ類	やや多	やや多	トマト 多(+)	キュウリ 並 トマト やや多～並(+)	気温高(+) 降水並(±)	
夏秋 果菜類 (平坦地)	コナジラミ類	やや多	やや多	—	ナス やや多～並(+)	気温高(+) 降水並(±)	
	アザミウマ類	やや多	やや多	—	ナス やや多～並(+)	気温高(+) 降水並(±)	

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(+)は発生を助長する要因、(-)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

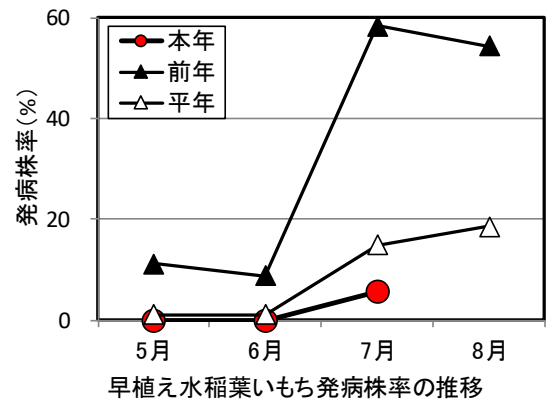
<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

2 予想発生量、根拠、対策等

◎早植え水稻

1) 穂いもち

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、葉いもちの発病株率5.6%（平年15.0%）と平年比やや少の発生であった（－）。
- (3) 対策 ア ほ場を観察し、上位葉で葉いもちの発生がみられる場合は直ちに薬剤防除を行う。

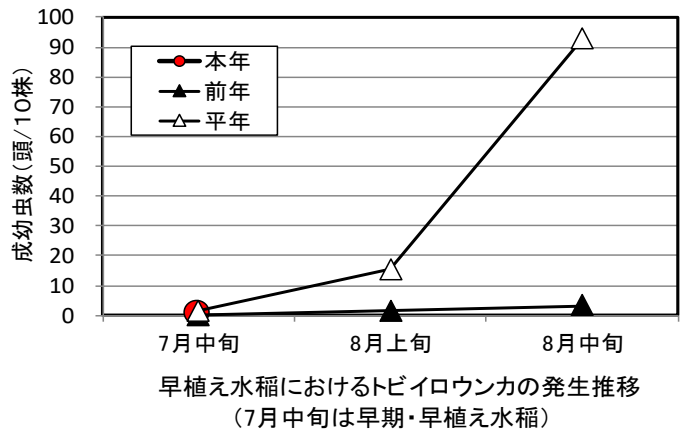


2) 紋枯病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、早期・早植え水稻で発病株率0.3%（平年0.5%）と平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策 ア 茎葉散布は穂ばらみ期から出穂期にかけて、粒剤施用は出穂20日前頃に行う。

3) トビイロウンカ

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では0.3頭/10株（平年1.4頭/10株）と平年比やや少の発生であった（－）。
イ 合志市に設置した予察灯調査では、7月第1～5半旬の累積誘殺数が37頭（平年102頭）と平年比やや少の誘殺数であった（－）。しかし、本年は7月第1半旬に32頭（平年26.3頭）と、まとまった飛来があり、移植時期が早かったほ場では、箱粒剤の効果の低下が懸念される（＋）。
- (3) 対策 ア 若齢幼虫期が防除の適期になる。病虫害防除所が発表する防除適期情報を参考に適期防除に努める。



4) コブノメイガ

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では0.0頭/株（平年0.2頭/株）と平年比やや少の発生であった（－）。
- (3) 対策 ア 水田における発生状況を確認し、7月（第1世代幼虫）の被害程度により防除要否を判断する。

防除時期	要防除水準
第2世代幼虫	第1世代幼虫の被害株率が20%以上、 または、被害葉率が0.2%以上

イ 防除適期は粒剤が発蛾最盛期（成虫羽化期）、粉剤・液剤は若齢幼虫期（発蛾最盛期から1週間後）である。病虫害防除所が発表する防除適期情報を参考に適期防除に努める。



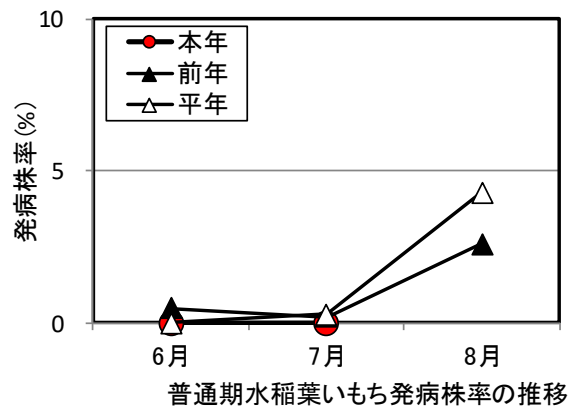
本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎普通期水稻

1) 葉いもち

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では発病が認められず（平年0.3%）、平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策 ア ほ場を観察し、上位葉で葉いもちの発生がみられる場合は直ちに薬剤防除を行う。

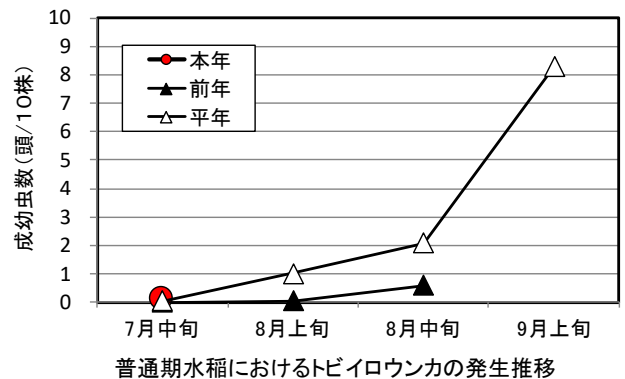


2) 紋枯病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では発病が認められず（平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策 ア 茎葉散布は穂ばらみ期から出穂期にかけて、粒剤施用は出穂20日前頃に行う。

3) トビイロウンカ

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、0.1頭/10株（平年0.1頭/10株）と平年並の発生であった（±）。
イ 合志市に設置した予察灯調査では、7月第1～5半旬の累積誘殺数が37頭（平年102頭）と平年比やや少の誘殺数であった（－）。



- (3) 対策 ア 若齢幼虫期が防除の適期になる。病虫害防除所が発表する防除適期情報を参考に適期防除に努める。

4) コブノメイガ

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、株あたりの葉巻き数0.1葉（平年0.0葉）と平年比やや多の発生であった（±）。
- (3) 対策 ア 水田における発生状況を確認し、7月（第1世代幼虫）の被害程度により防除要否を判断する。

防除時期	要防除水準
第2世代幼虫	第1世代幼虫の被害株率が20%以上、 または、被害葉率が0.2%以上

イ 防除適期は粒剤が発蛾最盛期（成虫羽化期）、粉剤・液剤は若齢幼虫期（発蛾最盛期から1週間後）である。病虫害防除所が発表する防除適期情報を参考に適期防除に努める。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

[「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」](https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html)

◎大豆

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア フェロモントラップによる各地のハスモンヨトウ誘殺数は平年比やや少であった(一)。

表 各地域のハスモンヨトウの誘殺状況（7月第1半旬～第4・5半旬）

市町村名（地域名）	本年	平年値	平年比（%）
合志市（栄）※5半旬まで	284.0	492.5	57.7
八代市（鏡）※5半旬まで	57.0	600.4	9.5
阿蘇市（一の宮）※4半旬まで	577.2	649.1	88.9
山都町（鶴ヶ田）※4半旬まで	68.8	86.4	79.7

単位：頭、 平年比（%）：(本年誘殺数/平年値)×100

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除を行う。

イ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したらただちに除去する。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

エ 熊本県病害虫防除所のホームページに掲載しているフェロモントラップの誘殺状況を確認し、防除の参考にする。

◎茶

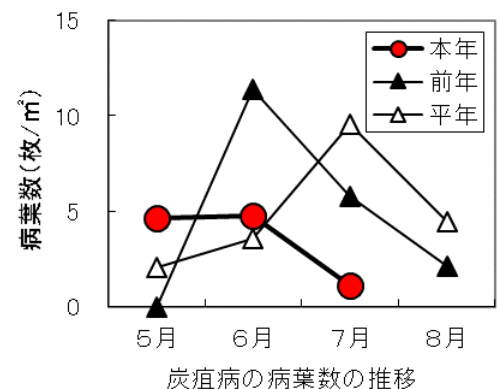
1) 炭疽病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、病葉数 1.1 枚/㎡（平年 9.5 枚/㎡）と平年比少の発生であった(一)。

(3) 対策 ア 新芽の開葉期に1～2回防除を行う。

イ 常発地では摘採葉を園外に持ち出し、残葉からの感染にも注意する。



2) カンザワハダニ

(1) 発生量：並

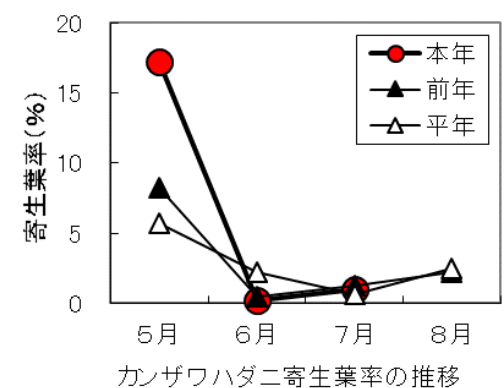
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率 1.0%（平年 0.6%）と平年並の発生であった(±)。

イ 茶業研究所（御船町）の7月第4半旬の調査では、寄生葉率 1.0%（平年 2.0%）と平年比やや少の発生であった(一)。

(3) 対策 ア ほ場での発生状況を観察し、発生が多い場合は、収穫使用前日数を考慮のうえ防除を行う。なお、規定の散布量を葉裏まで薬剤が届くよう丁寧に散布する。

イ 三番茶摘採園で発生が多い場合は、摘採時期を早めて被害の軽減に努める。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

3) チャノキイロアザミウマ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉が確認されず（平年の寄生葉率0.7%）、平年比やや少の発生であった（-）。

イ 生産環境研究所（合志市）の粘着トラップ調査では、7月第1～5半旬の捕獲頭数は36頭（平年127頭）と平年比少の発生であった（-）。

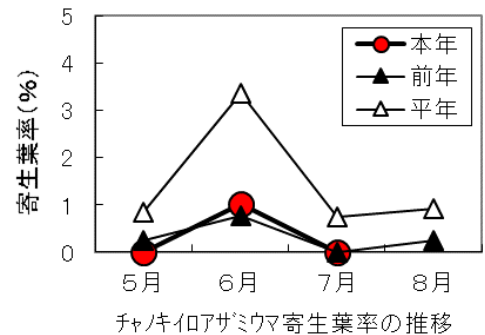
ウ 茶業研究所（御船町）の7月第4半旬のたたき落とし調査では、22頭（平年36頭）と平年比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策 ア 新芽が加害されるので、開葉期に防除する。

イ 有効積算温度シミュレーションによる各地の防除適期は、下表の羽化最盛期となる。

表 チャノキイロアザミウマ羽化最盛期予測結果（7月26日現在）

地点名	本年		平年		平年比	
	第5世代	第6世代	第5世代	第6世代	第5世代	第6世代
鹿北	8月8日	8月27日	8月17日	9月5日	9日早い	9日早い
菊池	8月1日	8月18日	8月10日	8月27日	9日早い	9日早い
甲佐	8月2日	8月19日	8月8日	8月25日	6日早い	6日早い
水俣	7月29日	8月15日	8月7日	8月24日	9日早い	9日早い
上	8月5日	8月23日	8月11日	8月29日	6日早い	6日早い



4) チャノミドリヒメヨコバイ

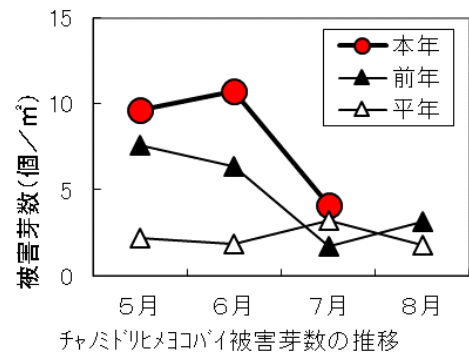
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害芽数は4.1個/m²（平年3.2個/m²）と平年並の発生であった（±）。

イ 茶業研究所（御船町）の7月第4半旬のたたき落とし調査では、11頭（平年7頭）と平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 新芽が加害されるので、開葉期と2～3葉期に防除する。

イ 発生時期が重なるチャノホソガ、チャノキイロアザミウマとの同時防除を行う。



5) チャノホソガ

(1) 発生量：やや少

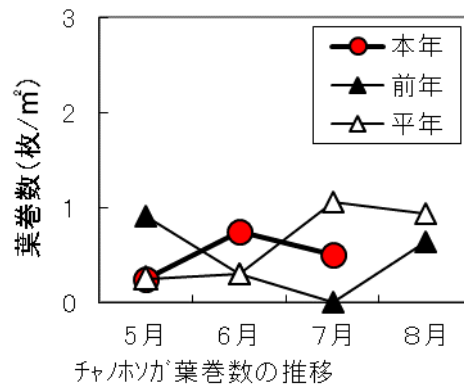
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害葉0.5枚/m² (平年1.1枚/m²)と平年比やや少の発生であった(一)。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップ調査では、7月第1～5半旬の捕獲頭数は87頭(平年218頭)と平年比やや少の発生であった(一)。

ウ 茶業研究所(御船町)のフェロモントラップ調査では、7月第1～4半旬の捕獲頭数は110頭(平年442頭)と平年比少の発生であった(一)。

(3) 対策 ア 新葉が加害されるので、開葉期と2～3葉期に防除する。

イ 発生時期が重なるチャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマとの同時防除を行う。



6) チャノコカクモンハマキ

(1) 発生量：やや少

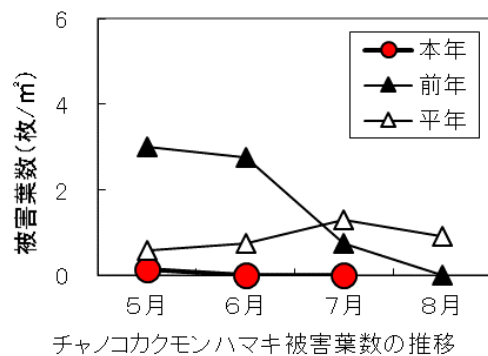
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害葉は確認されず(平年1.3枚/m²)、平年比やや少の発生であった(一)。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップ調査では、7月第1～5半旬の捕獲頭数は129頭(平年218頭)と平年比やや少の発生であった(一)。

ウ 茶業研究所(御船町)の7月第4半旬のフェロモントラップ調査では、2頭(平年10頭)と平年比やや少の発生であった(一)。

(3) 対策 ア 新芽を好むが、新葉、旧葉の区別なく大部分の葉を綴るので、発蛾最盛期の7日～10日後に若齢幼虫を対象に防除を行う。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎カンキツ

1) 黒点病

(1) 発生量：並

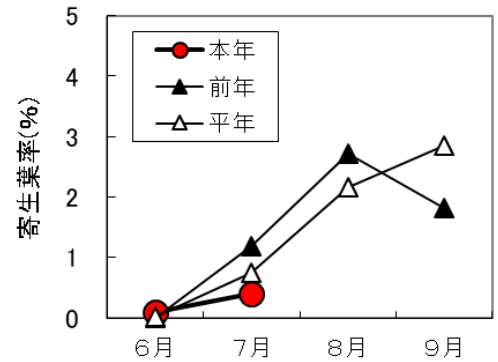
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病果率0.4% (平年0.8%) と平年並の発生であった(±)。

イ 果樹研究所(宇城市)の予察ほ場では、7月第5半旬の発病果率は90.0% (平年95.4%)、発病度16.9 (平年34.3) と平年並の発生であった(±)。

(3) 対策 ア 保菌率が高い直径5~10mmの枯枝を剪除する。

イ 剪定枝は、伝染源になるので園外に持ち出し処分する。

ウ 前回の散布から累積降水量が200mm~250mmを越えた時期に防除を行う。降雨が少ない場合は、前回の散布から30日経過したら必ず防除を行う。



黒点病の発病果率の推移

2) かいよう病

(1) 発生量：並

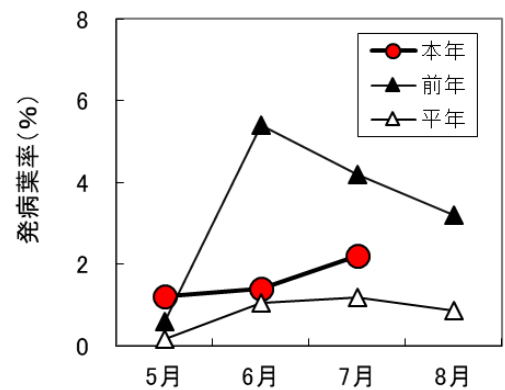
(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、一部ほ場で多発生が確認され、発病葉率2.2% (平年1.2%)、発病果率2.0% (平年0.6%) と平年比やや多の発生であった(+).

イ 果樹研究所(宇城市)の予察ほ場では、7月第5半旬の発病葉率は5.2% (平年8.9%)、発病果率12.0% (平年38.4%) と平年比やや少の発生であった(-).

(3) 対策 ア 伝染源となる発病葉や枝、果実は除去する。

イ ミカンハモグリガの食害痕は、本病が発病しやすいので防除および剪除を行う。

ウ 強風による葉や枝の損傷を少なくするため、防風樹がない園では防風網を設置する。



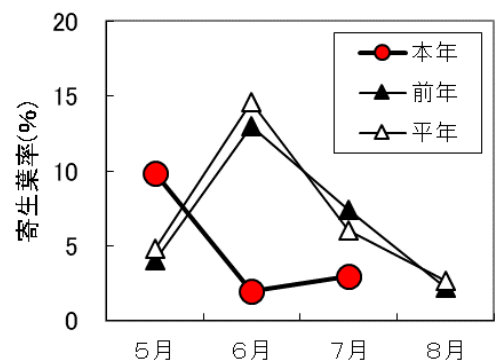
かいよう病発病葉率の推移

3) ミカンハダニ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、雌成虫の寄生葉率3.0% (平年6.5%)、寄生頭数0.6頭/10葉 (平年2.3頭/10葉) と平年比やや少の発生であった(-).

イ 果樹研究所(宇城市)の予察ほ場では、7月第5半旬の雌成虫の寄生葉率は1.0% (平年5.0%)、寄生頭数0.1頭/10葉 (平年1.4頭/10葉) と平年比やや少の発生であった(-).



ミカンハダニの寄生葉率の推移



- (3) 対策 ア 定期的に園を観察し、雌成虫の寄生葉率が30～40%、または雌成虫の寄生頭数が10葉当たり5～10頭に達した場合は防除する。
 イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。

4) チャノキイロアザミウマ

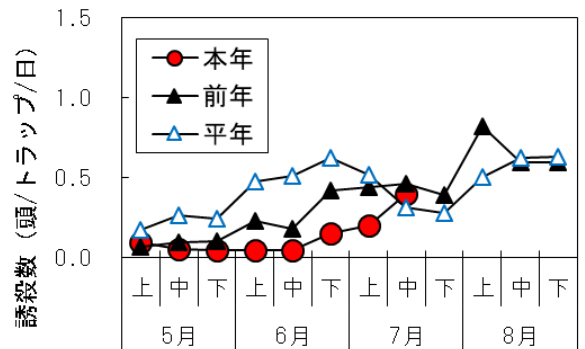
(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、被害果率0.5%（平年0.3%）と平年並の発生であった（±）。

イ 熊本市河内町の黄色粘着板調査では、7月中旬の誘殺数が0.4頭/日（平年0.3頭/日）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策 ア 平年に比べて羽化最盛期が6～9日早い予測となっているため、下表を参考に早めの防除に努める。

イ 発生調査は、果実（100果）を5,000～10,000倍に薄めた展着液または洗剤で洗い、ティッシュペーパーで濾した後、ルーペや実体顕微鏡で虫数を数える。捕獲された虫数が10頭を越えた場合は防除を行う。



黄色粘着板によるチャノキイロアザミウマ誘殺数の推移 (熊本市河内町)

表 チャノキイロアザミウマ羽化最盛期予測結果 (7月26日現在)

地点名	本年		平年		平年比	
	第5世代	第6世代	第5世代	第6世代	第5世代	第6世代
熊本	7月25日	8月10日	7月30日	8月16日	5日早い	6日早い
三角	7月31日	8月16日	8月4日	8月22日	4日早い	6日早い
本渡	8月2日	8月19日	8月9日	8月28日	7日早い	9日早い
八代	7月28日	8月13日	8月2日	8月20日	5日早い	7日早い
水俣	7月29日	8月15日	8月4日	8月22日	6日早い	7日早い

◎ナシ

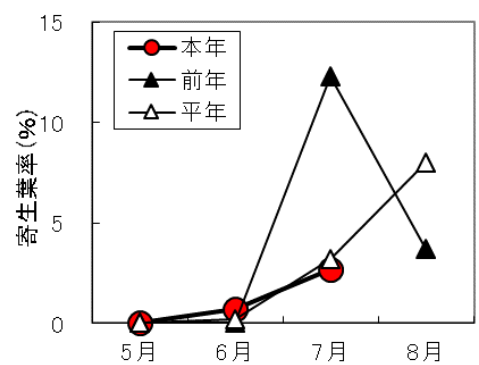
1) ハダニ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では一部の園で多発生がみられ、寄生葉率2.7%（平年3.2%）と平年並の発生であった（±）。

イ 7月の防除員報告では3地域中1地域で平年比やや多、2地域で平年並の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 定期的に園を見回り、雌成虫の寄生葉率が20%以上、1葉当たり1～2頭に達したら防除する。



ハダニ類寄生葉率の推移



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

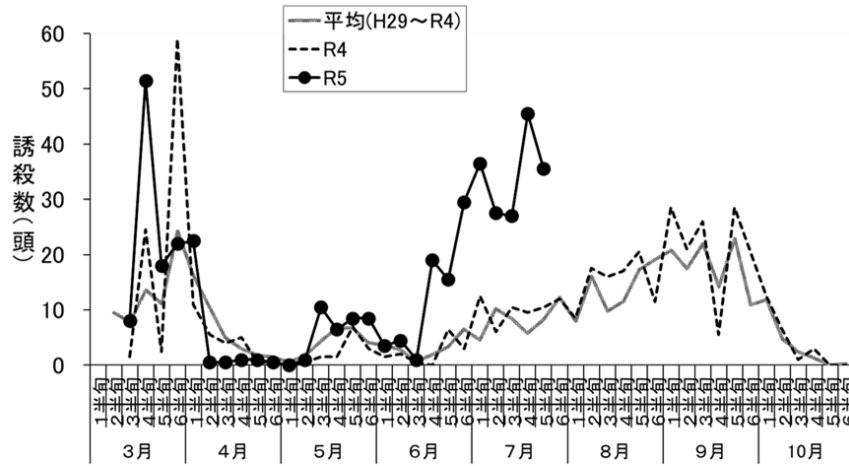
2) ナシヒメシンクイ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生梢は見られなかった（－）。

イ 果樹研究所（宇城市）のフェロモントラップ調査では、6月中旬以降に誘殺数が増加し、平年より多く推移している（＋）。

ウ 7月の防除員報告ではやや多～並の発生であった（＋）。



ナシヒメシンクイフェロモントラップ誘殺消長(果樹研究所: 梨)

(3) 対策 ア 果実の成熟に伴い侵入量が急速に増加し、収穫直前の果実を激しく加害するため、定期的に園を見回り、成虫の発生盛期～10日後頃を中心に薬剤防除を行う。

イ 性フェロモン剤（交信攪乱剤）は、成虫発生初期から設置するが、フェロモンは空気より重く、傾斜地では下に流れるため、ほ場の上部では設置本数を多くする。なお、モモノゴマダラノメイガには効果がないので、注意する。

◎果樹全般

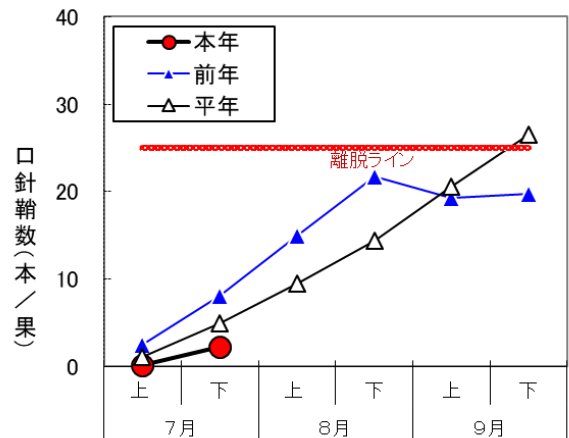
1) カメムシ類

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 予察灯及びフェロモントラップの7月第1～5半旬の誘殺数は、下記表のとおり3地点とも平年比少であった（－）。

イ ヒノキ球果の1果当たりの口針鞘数が25本に達する時期が、新世代成虫がヒノキ球果から離脱し、樹園地へ飛来する時期の目安となる。7月下旬におけるヒノキ球果の1果当たり口針鞘数は、県内6地点の平均が2.3本（平年4.9本）と平年比やや少であったことから、球果からの離脱時期は9月上旬頃からになると予測される（－）。

ウ 7月下旬のヒノキ球果に寄生する成幼虫数は2.8頭／5枝（平年5.0頭／5枝）と平年比やや少であった（－）。



ヒノキ球果口針鞘数の推移



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

表 各地域のカメムシ類の誘殺状況（7月第1半旬～第5半旬）

地域名	チャバネアオカメムシ						ツヤアオカメムシ					
	予察灯			フェロモントラップ			予察灯			フェロモントラップ		
	本年	平年値	平年比 (%)	本年	平年値	平年比 (%)	本年	平年値	平年比 (%)	本年	平年値	平年比 (%)
合志市	23	98	23	5	328	2	5	50	10	0	0	0
宇城市 (松橋町)	17	556	3	4	2,202	0	21	344	6	0	10	0
天草市 (本渡町)	54	9,932	1	0	4,218	0	73	851	9	0	62	0

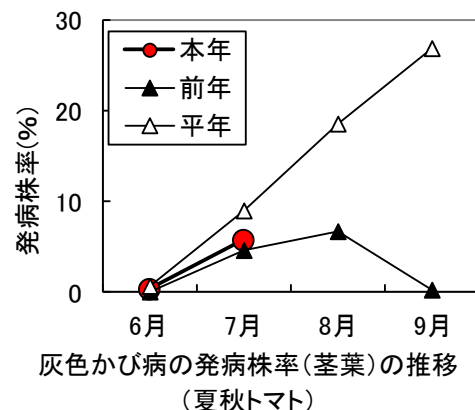
単位：頭、平年比 (%) : (本年誘殺数 / 平年値) × 100

- (3) 対策 ア 果樹カメムシ類は、局地的に飛来し、被害をもたらすことがあるので、定期的に園を見回り、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。特に、山間部や山沿いの園地は被害を受けやすいので注意する。
- イ 最新のカメムシ類の誘殺状況や球果からの離脱予想を、病害虫防除所ホームページに掲載しているのので、確認し防除の参考にする。

◎夏秋トマト

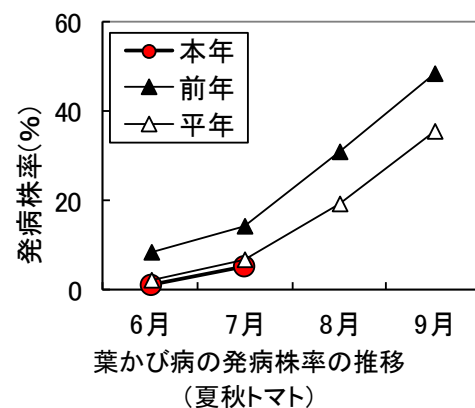
1) 灰色かび病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、茎葉での発病株率が5.7%（平年8.9%）と、平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策 ア 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去する。
- イ 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。
- ウ 9月の秋雨の時期に発生が多くなる傾向にあるため、発生が見られたほ場では8月の防除を徹底する。
- エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) 葉かび病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率5.0%（平年6.5%）と、平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策 ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。
- イ 気象予報に留意し、発生前から定期的に葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。
- ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
- エ 被害葉や老化葉は早めに除去する。

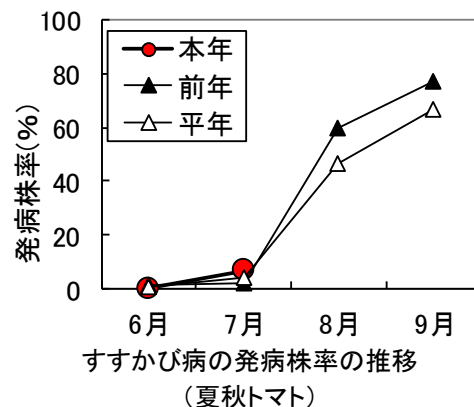


本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

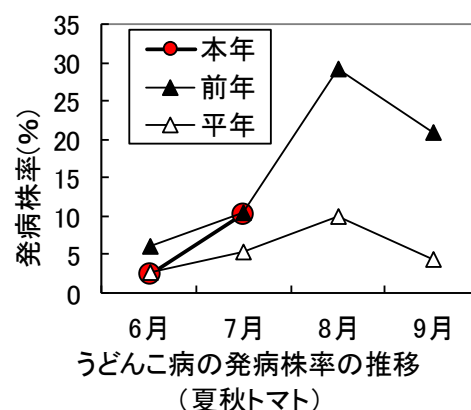
3) すずかび病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率6.7%（平年4.5%）と、平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策 ア 摘葉等による通風採光を図り、多湿にならないようにする。
イ 気象予報に留意し、発生前から定期的に葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。
ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。
エ 被害葉や老化葉は早めに除去する。



4) うどんこ病

- (1) 発生量：やや多
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株率10.3%（平年5.3%）と、平年比やや多の発生であった（+）。
- (3) 対策 ア 乾燥条件でもよく発生するので、ハウス内をあまり乾燥させないように管理する。
イ 発病葉は早めに取り除き、ほ場外で処分する。
ウ 多発すると防除が困難となるため、発生初期の防除を徹底する。
エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎イチゴ育苗ほ

1) 炭疽病

- (1) 発生量：並
- (2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。
- (3) 対策 ア 親株床、育苗床はビニールで雨よけをする（3防除のポイント等の「イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう」を参照）。
イ 頭上かん水を避け、株元に手かん水する。
ウ 育苗ポットの間隔を広げ、不要な下葉を除去し通風採光を良くする。
エ 発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。
オ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努める。特に、降雨後及び摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。薬剤散布は株元まで十分かかるように行う。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

[「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」](https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html)

2) ハダニ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率38.3%（平年18.7%）と、平年比やや多の発生であった（+）。

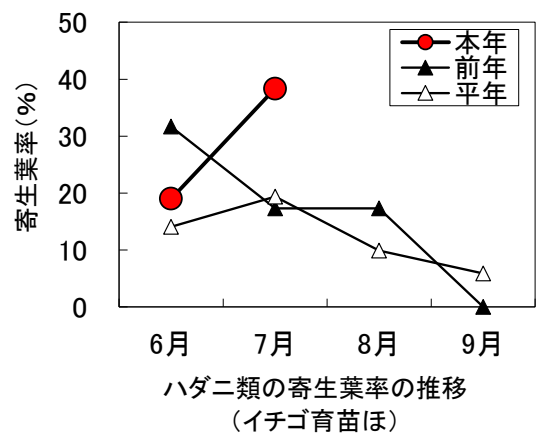
(3) 対策 ア 本ばに持ち込むと防除が困難となるため、育苗期の防除を徹底する（3 防除のポイント等の「イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう」を参照）。

イ 寄生葉を早めに取り除き、ほ場外で処分する。

ウ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期から防除を徹底する。

エ 葉の展開に合わせて適正に葉かぎを行い、薬剤は葉裏にも十分かかるように散布する。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、育苗から本ばでの栽培期間を通じた防除計画を立て、育苗期は気門封鎖剤を主体とした防除を行う。



3) アブラムシ類

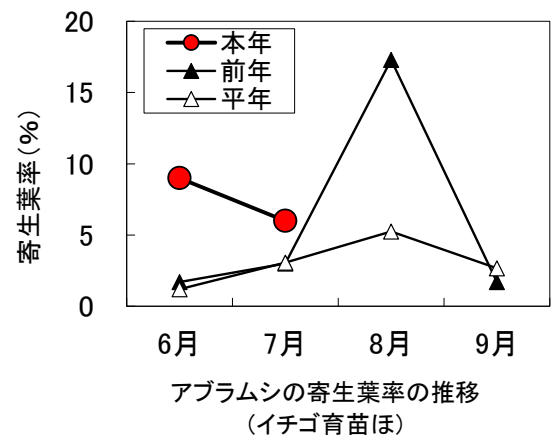
(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 7月の巡回調査では、寄生葉率6.0%（平年3.1%）と、平年比やや多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 本虫の寄生した株をハウス内に持ち込まない。

イ 発生源になる周辺雑草の除去を行う。

ウ ワタアブラムシについては薬剤感受性の低下した個体群も見られるので、薬剤防除にあたっては、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎夏秋果菜類（高冷地）

1) コナジラミ類

(1) 発生量：やや多

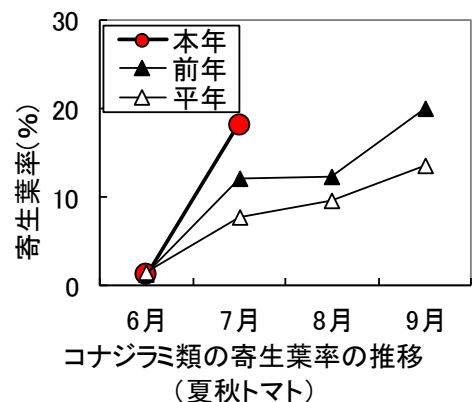
(2) 根拠 ア 夏秋トマト7月の巡回調査では、寄生葉率18.2%（平年7.6%）と、平年比多の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 幼虫や成虫などの発育ステージによって有効薬剤が異なる。複数の発育ステージの個体が混在すると防除が困難となるので、初期防除を徹底する

イ 施設内部の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ 黄色粘着トラップを施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎夏秋果菜類（平坦地）

1) コナジラミ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 夏秋ナスの防除員報告では、平年比やや多～並の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 密度が高くなると各発育ステージが混在し防除が困難となるため、低密度での防除を徹底する。

イ 施設内部と周辺の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

ウ 密度が高くなると防除が困難となるため、黄色粘着トラップ等を施設内に設置し、早期発見に努める。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

2) アザミウマ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 夏秋ナスの防除員報告では、平年比やや多～並の発生であった（+）。

(3) 対策 ア 粘着トラップ等を設置し、早期発見に努める。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類の黄化えそ病の病原ウイルスを、ミカンキイロアザミウマはトマト黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類およびトマトでは本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病対策「入れない」対策を徹底しましょう」を参照）。

ウ 施設内部と周辺の雑草は、重要な増殖源となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

3 防除のポイント等

紋枯病の発生に注意しましょう

紋枯病は高温、多湿の気象条件、及び多肥、密植で発病が多くなります。福岡管区気象台が7月27日に発表した向こう1ヶ月の予報では、降水量は平年並ですが、気温は高くなる予想です。普通期水稻では、最高分けつ期頃から発生し始め、穂ばらみ期以降に上位葉鞘に病斑が進展します。特に、出穂期以降に高温が続くと進展するため、注意が必要です。

紋枯病の発生が多い、または紋枯病に登録のない箱粒剤を使用しているほ場では、以下の対策を行いましょう。

(1) 普通期水稻では、穂ばらみ期から出穂期にかけて薬剤散布を行い、その後の進展状況に応じて2回目の散布を行う。

(2) 防除の目安となる要防除水準は、穂ばらみ期の発病株率が20%である。

(3) 茎葉散布は穂ばらみ期から出穂期にかけて、粒剤施用は出穂20日前頃に行う。



台風接近時の虫媒伝染性ウイルス病まん延防止対策について

近年、トマトやウリ科野菜における抑制栽培及び促成栽培での虫媒伝染性ウイルス病の多発要因の一つとして、育苗期や定植初期の台風接近に伴って、ビニル被覆を除去したり、定植前の苗を移動させた際に、保毒虫が侵入し、生育初期に感染してしまうことが考えられる。

これからの時期は、トマトやウリ科野菜で抑制栽培の定植や促成栽培の育苗期が始まる一方、野外での微小害虫の密度が高くなり、台風シーズンも本格化するため、台風接近時には以下の対策を行い、生育初期のウイルス感染を防止しましょう。

1 事前対策

- (1) 被覆ビニルや防虫ネットに破損や隙間が無いか点検し、必要に応じて補修する。
- (2) ハウス内の感染株は伝染源となるので、抜き取り適正に処理するか茎を切断する等して枯らしておく。
- (3) 台風の進路等によっては、ビニルを除去する可能性があるためコナジラミ類・アザミウマ類の飛散予防策として、防除を徹底し生息密度を下げる。
- (4) 台風の被害が大きいことが予想される場合、鉢上げ前の播種箱やセルトレイの苗は納屋等に移動する。
- (5) 育苗ハウスから苗を運ぶ際には、移動中にコナジラミ類・アザミウマ類が寄生しないよう、運搬車等の荷台を防虫ネットやほろ等で覆う。

2 事後対策

- (1) ビニル・防虫ネットを除去した場合、早急に再度展張する。
- (2) 移動しておいた苗は育苗ハウス内に運び込む。
- (3) 寒冷紗等の被覆を行った苗は、早急に被覆を除去する。
- (4) 上記の作業が終了したら、薬剤散布を実施し、コナジラミ類・アザミウマ類の防除を行う。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

[「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」](https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html)

野菜のウイルス病対策「入れない」対策を徹底しましょう

本県では「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「スイカ退緑えそ病」、「トマト黄化えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病気の原因となる各ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これらのウイルス病対策は、ウイルス感染植物を除去することと保毒虫を防除することが基本となります。しかし、薬剤処理による媒介微小害虫の防除だけではウイルス病を完全に抑えることは困難であるため、耕種的防除や物理的防除を組み合わせ合わせた総合的な防除対策を講じる必要があります。

特に、これからの時期はトマトやウリ科野菜で抑制栽培の定植や促成栽培の育苗期が始まる一方、野外での微小害虫の密度が高くなり、施設内への飛び込みが更に多くなるため、育苗期や定植直後にウイルスに感染するリスクが高まる時期となります。

そこで、以下の対策を必ず行いましょう。

保毒虫を栽培ほ場に「入れない」対策

上記のウイルス病は、微小害虫がいなければ感染拡大しません。そこで、野外から微小害虫を施設内に入れないようにしましょう。感染が早いほど経済的被害が大きくなるため、特に育苗期の対策はしっかり行いましょう。

1 育苗期

- (1) 育苗ハウスは、本ぽと別に設け、ハウスの開口部(サイド、換気部など)には必ず目合い0.4mm以下の防虫ネットで、天井部は近紫外線除去フィルムで被覆する。
- (2) 雑草および野良生えは微小害虫のすみかとなるため、育苗開始10日前までにハウス内・周囲から除去する。
- (3) ハウス内に粘着トラップを設置し、侵入した害虫の密度を低下させる。
- (4) 発病株は二次伝染源となるので、見つけ次第直ちに施設外に持ち出し処分する。
- (5) 定植2～3日前に、育苗期後半に登録のある薬剤を処理する。

2 本ぽ定植以降

- (1) サイド開口部は目合い0.4mm(アザミウマ対策の場合は目合い1mm以下)防虫ネット、谷換気部は、目合い1mm以下の防虫ネットで被覆する。
- (2) ハウス周辺に雑草および野良生えが残っていると、微小害虫が飛び込みやすくなるため定植10日前までに除去する。
- (3) 育苗ハウスから本ぽへ苗を運ぶ際には、野外の微小害虫が付かないように運搬車等の荷台を防虫ネットや幌等で覆う。また、定植作業中は、出入口をきちんと閉めて作業する。
- (4) 育苗期後半に薬剤処理ができていない場合には、定植時に登録のある薬剤を必ず処理する。



イチゴ育苗ほでの病害虫の発生を防止しましょう

1 炭疽病

保菌株からのまん延を防止するため、以下の防除対策を徹底しましょう。

<防除対策>

- (1) 苗床は必ず雨よけを行う(寒冷紗は雨よけにならない)。
- (2) 育苗ほは、冠水しないように排水対策を講じる。
- (3) 頭上かん水は避け、株元に手かん水する。
- (4) 定期的に予防防除を行う。特に、降雨後や摘葉、ランナー切除後は感染しやすいので必ず防除する。
- (5) 発病株は速やかにほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

2 ハダニ類

本ほに持ち込まないように、育苗期の防除を徹底しましょう。

<防除対策>

- (1) 育苗ほ周辺およびほ場内の雑草は定期的に除草する。
- (2) 下葉の裏に多く寄生しているので、老化葉は積極的に除去する。
- (3) 除去した下葉は、ほ場外に持ち出し、速やかに処分する。
- (4) 薬剤防除の際は、薬液が葉裏に十分かかるように、苗の間隔を十分に確保し、丁寧に散布する。
- (5) 育苗ほでの発生が認められた場合は、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、気門封鎖剤を積極的に活用する。ただし、気門封鎖剤は、直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、残効も短いので、5～7日の間隔で複数回散布する。
- (6) 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

III 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
早植え 水稻	斑点米カメムシ類	並	7月の巡回調査では、寄生数が0.1頭/25株(平年0.1頭/25株)と平年並の発生であった(±)。合志市に設置した予察灯調査では、平年比やや少(-)。
夏秋ナス (平坦地)	灰色かび病	並	防除員報告は、平年並～少(-)。発生が見られたほ場では8月の防除を徹底する。
	すすかび病	並	防除員報告は、平年並(±)。葉裏にも十分かかるよう薬剤散布を行う。
イチゴ 育苗ほ	うどんこ病	並	巡回調査では発病株は確認されず(平年株率0.2%)、平年並(±)。防除員報告は平年並(±)。初期発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

[「https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html」](https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html)

作物	病虫害名	発生予想 (平年比)	発生概況及び注意すべき事項等
夏秋 キュウリ (高冷地)	べと病	やや多	防除員報告は、やや多(+) 適正な肥培管理を行う。
	うどんこ病	並	防除員報告は、平年並(±) 初期発生を認めたら直ちに薬剤防除を行う。
夏秋 キャベツ	黒腐病	並	防除員報告は、平年比やや多～並(+) 発生後の防除は困難なため、激しい風雨が予想される場合には事前に薬剤散布を行う。
野菜類 全般	ハスモンヨトウ	並	フェロモントラップの7月第1～4半旬の誘殺数は、阿蘇市、山都町で平年並、合志市で平年比やや少、八代市で平年比少(±) 防除員報告は、夏秋ナスで平年比やや多～並、夏秋トマト、イチゴ育苗ほ、サトイモで平年並、露地キクで平年比やや少(±) 早期発見、早期防除に努め、施設栽培では、防虫ネットで侵入を防ぐ。
	オオタバコガ	並	フェロモントラップの7月第1～4半旬の誘殺数は、阿蘇市、山都町で平年並、合志市、八代市で平年比やや少(±) 防除員報告は、ピーマンで平年比やや多、夏秋ナスで平年比やや多～やや少、夏秋トマトで平年並、夏秋キャベツで平年並～少、露地キクで平年比やや少 早期発見、早期防除に努め、施設栽培では、防虫ネットで侵入を防ぐ。
【野菜病虫害の共通対策事項】 <ul style="list-style-type: none"> ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。 			

IV その他

農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病虫害防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)
(TEL: 096-248-6490) にお問い合わせ下さい。

※なお、本文及び各種トラップのデータ等はホームページ「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」上に掲載しています。



本予報と関連データは、ホームページに掲載しています。

「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」